

自己評価および外部評価結果

事業所名: **めだかの学校シニア**

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名(1)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I 理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	基本理念を大切に実践して取り組んでいる。会議、朝礼等で周知徹底をしている。	「安心して笑顔で、一日一日大切に過ごして頂く」を事業所の基本理念として、職員会議や朝礼で確認し、その人らしく生活できるよう一人ひとりに合わせた支援に取り組んでいる。会議では、日々利用者に関わる際の具体的な支援について職員間で話し合い、理念を共有して実践に努めている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	自治会に加入して、地域行事にも積極的に参加している。近隣住民との挨拶や会話を大切に雪が降った時などは積極的に地域の雪かきなどを行い交流を深めている。地区役員もやっている。	自治会に加入して、管理者が地区役員をしている。夜間に開催する役員会に出席して、地域とのつながりを築いている。地域の季節行事にも利用者と一緒に参加し、地域住民との関わりをもっている。また、公民館で行われる文化祭には、利用者の習字や巻紙の貼り絵を出品し、日頃より練習した合唱も披露している。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	施設に見学に来てくれた際や、運営推進会議の時や地域行事の時に相談に乗れるようにしている。実際に地域の方から相談に来る方もいる。頼まれれば地域の会合にも参加している。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議内で意見・要望を聞きそこでの内容を職員会議などで話し、周知徹底してサービスの向上になるように努めている。	2か月に1回開催している会議には、利用者も参加している。事業所からは活動内容等の報告を行い、意見・要望をもらうようにしている。また、地域の参加者から、行事の情報を得ている。利用者には、事業所で開催した行事の感想を聞いている。その他、話題になった時事問題を管理者が提供し意見を出しやすくしている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	日頃から電話等で相談できる関係作りをしている。逆に聞かれる事もあり相互に信頼関係を作れるようにしている。クレーマーの家族がいた時は甲府市にも状況を伝え、一緒に考え取り組んだ事例がある。	運営推進会議の議事録や認定更新の機会には、出向いて担当者に事業所の実情を伝えている。市からは地域と事業所の関係について聞かれた事があり、施設見学会を開いて実情を話し、地域から理解が得られたことを伝えた。また、以前から在職している職員とは顔なじみで協働関係が作られている。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束マニュアルに従い理解すると同時に安易に身体拘束をしないように徹底している。また会議や内部研修でも言い続け職員に周知してもらっている。言葉によるスピーチロックも禁止している。利用者の尊厳を大切にすることを徹底している。	法人全体での職員研修会が月1回開催され、出席した職員の復命書により職員間で共有している。外出しそうな様子があれば止めるのではなくさりげなく声をかけてついて行き見守るようになっている。また、行動をさえぎるような言葉は置き換え、不安の要素にならないよう会話に気をつけている。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	会議や研修等でも虐待について勉強会を行い、職員間でも言い合える職場作りをしている。職員の顔色ではなく利用者の顔色を見たケアを心がけ実践している。虐待防止マニュアルを作り対応している。			
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	以前制度を利用していた方がいたが今はないので今度利用する方がいてもいいように学んでいきたい。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	家族とも話しやすい関係になるよう努めている。電話連絡などでも入所後も安心して頂けるような配慮を心がけている。契約内容に変更が生じた場合は通知、電話をして確認をしている。			

自己評価および外部評価結果

事業所名: **めだかの学校シニア**

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名(1)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱の設置や口頭でクレーム等頂いた時は迅速な対応を心がけている。 何でも話せる雰囲気作りをして話ができるようにしている。 そのために行事等にも参加してもらっている。 運営推進会議に参加してもらい意見を述べてもらっている。	家族等の面会時には、声をかけて何でも言ってもらえるように心がけている。「同性介助にしてほしい・洗濯物が間違っていた・預金を引き出すので銀行で待ち合わせたい」等の要望が家族からあり、それぞれについて対応している。また、運営推進会議や行事への参加で家族等とは信頼関係があり、出された意見・要望はケアに反映するよう努めている。		
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議や日々の業務の中で困ったことなどを聞き働きやすい環境作りをしている。 職員にも丁寧にに関わりコミュニケーションをとるようにしている。	職員会議等で、職員の意見を聞くようにしている。日頃からもコミュニケーションを図るように心がけてプライベートの話から仕事、家族の話も聞いている。管理者は、働きやすい環境づくりに努めて、職員との親睦会を定期的に設けている。休暇の希望や備品購入など要望は受け入れられている。		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員が気持ちよく働けるような配慮を行っている。能力ややる気に応じた昇給を行っている。 リーダー手当や資格手当をつけてやる気につながるような取り組みをしている。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	年に数回ある内部研修などを積極的に推進して行い、各職員の質の向上を目指している。また内部だけではなく、外部の研修会にも積極的に参加する機会を提供している。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人内にいくつもの施設があるので、内部での交流研修は積極的に行っている。数年前には他施設研修会も行った研修などで他施設の方と交流ある時には積極的にコミュニケーションを図り情報交換している。			
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前の家族からの聞き取りや入所後も要望等を聞き考慮したケアを心がけている。そのために日頃の面会時や行事の時に積極的にコミュニケーションを図り関係づくりに努めている。 利用者本人にも気付きを大切にしながら何が必要で何を求めているのかを聞き取りしている。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所前や入所後も要望等を聞き考慮したケアをしている。何かあれば電話等で情報交換をして何でも話ができる関係性作りをしている。 できることやできないことも極力伝えて家族と共に支援している。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	柔軟な対応を常に心がけ、利用者にとって何が一番最適か？を常に考えてケアしている。思い込みによる決めつけた対応にならないように色々な角度から物事を見る癖をつけて判断するようにしている。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家庭的な雰囲気作りが心がけ、自分の親や大切な方が入所しても安心して預けられるような環境・関係づくりに努めている。 職員もアットホームな雰囲気一日一日を過ごせるように仕事をしている。			

自己評価および外部評価結果

事業所名: **めだかの学校シニア**

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名(1)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	普段の面会以外に行事の時に家族にも来てもらい一緒に過ごすようにしてもらっている。家族と共に一緒に利用者をケアしていければ良いと考えている。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	個別外出の時や散歩時などになじみの場所に行ったり、面会等で知り合いの方が来た時は長居しやすい空間作りを心がけ本人のためにも気軽にまた来てもらえるよう配慮している。地元的美容室や知人のところに遊びに行ったり、長年勤めていた職場にも行くようにしている。	入居時に利用者や家族等から聞いて、馴染みの人や場所の把握をしている。勤めていた職場に行ったり、職場の人が面会にも来ている。家族からお墓の場所を聞いて、お墓参りや行きつけの美容院・理容室に職員が付き添い出掛けている。手紙の返信、電話の取次ぎなど、細やかに関係継続の支援に努めている。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	家庭的な雰囲気作りの中で、縁あって9名で生活している。同じメンバーで何年も生活出来るように温かい雰囲気を心がけている。そのためには皆でいろいろな行事などを取り組んでいる。 孤立しそうな利用者には職員が関わり支援している。			
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後もお茶を飲みに来たり行事に来てくれる家族の方が来てお互いが話し合える関係は継続している。こちらから連絡するときがある。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	個別に話をしたり「その人」らしく過ごせるように心がけている。自分の意思が表現できない方にはご家族の意向を確認して対応している。	利用者とは日頃からコミュニケーションを取り、昔の話を聞きながらどのように暮らしたいのかそれとなく聞いて確認するようにしている。また、利用者同士で話ができるような工夫もして把握に努めている。意思疎通が困難な利用者は、家族等から念入りに聞いて情報を得るようにしている。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所前に聞き取りを行い生活歴を把握して職員にも周知徹底してもらいケアに当たっている。利用者本人をよく見て行動など気になる所があったら本人、家族に確認している。 過去にはここが「家」だと認識してくれた利用者もいた。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの生活パターンを把握してその中で本人らしく生活できるようなケアに努めている。それでいて居室に常に一人でいて孤立しないような配慮をしている。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	計画作成時に本人・家族の希望を反映できるような計画にしている。面会時などに家族からも要望や気付いたことなどその意見を大事にしてケアに当たっている。それが実践に移していけるような努力を続けたい。	入居前のケアマネジャー・利用者・家族等から得た情報を基に介護計画を作成し、入居後1~2週間で見直しを行っている。毎月、モニタリングを行い職員会議で話し合い、3か月後に見直し、現状に即した介護計画を作成している。また、状況の変化に応じ必要時には、主治医・往診医の意見も反映している。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の記録を記入してそれを個々の介護計画にも反映したり、処遇会議での意見交換の材料をしている。職員間で気付いたことや統一事項は申し送りノートに記入してケアに活かせるようにしている。			

自己評価および外部評価結果

事業所名: **めだかの学校シニア**

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名(1)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者の身内で不幸や祝い事があった場合など、職員が付き添い一緒に参加したりしてサービスのイメージを決めつけないような配慮を行っている。勤めていたお店に職員付き添いで訪問したり入所前に行っていた美容院に行くなどしている。			
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域包括支援センターと連携をとったり、地域住民との関わりで地域に溶け込みながら快適かつ安心・安全な生活が送れるよう努めている。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	当法人内にクリニックがある旨を伝え、そこに病院を移しても構わない利用者は紹介状を書いてもらい健康管理のフォローを行っている。病院を変わずそのままの方も当然あり家族との連携の中で受診等行い健康管理を行っている。	定期受診については、入居時に利用者・家族に関して希望するかかりつけ医としている。法人内のクリニックをかかりつけ医として月2回、職員同行で受診している。また、往診医を希望して受診している利用者もいる。歯科は職員が対応している。退院後の利用者の病院受診には家族に職員も同行し普段の様子を伝えている。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	利用者が特変時などはリーダー→管理者に伝わり、その中で家族と相談して受診や対応を決めるようにしている。また法人内の看護師とも連携してケアをしている。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院した際は病院との連携を密に行い、退院の許可がおりた時にはカンファレンスを行い速やかに対応できるようにしている。また入院中にADL低下することもあるので介護計画も変更しながら医師・看護師ばかりではなくリハビリ職員からも情報を聞き対応している。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入院前に当然家族に伝えると同時に当法人にあるクリニックや特別養護老人ホームなどへ入所可能な旨は説明し広い選択肢の中で方向性を決めるようにしている。	入居前に重度化や終末期について、事業所での対応を説明している。食事の低下等、重度化した場合については、主治医の指示や判断を聞いている。状況に変化が生じた場合は、家族の意向を書面にして確認している。往診医の対応もあり話し合いの機会を作り、状況の変化のたび家族に意志を確認しながら取り組んでいる。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	最低年に1回は内部で救急法の勉強会を行い職員の技術の向上をしている。それ以外にも外部の研修で学ぶようにしている。 いざという時に落ち着いて対応するように話もするようにしている。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害対応マニュアルを作成している。 年に数回避難訓練を行い利用者はもちろん職員の訓練をしている。通報訓練も行うようにしている。	年間を通して避難誘導訓練を実施している。管理者が防災講話を行った後、火災や地震等発生する災害をその都度替えて、職員と利用者が一緒に避難ができるよう訓練をしている。利用者が行事で外出する時にも避難訓練につなげている。下階のジュニアは毎月訓練を実施していて、夜間等協力体制を築いている。		
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	「尊厳」をモットーに一人ひとりを大切にして利用者のケアをしている。言葉遣いに気をつけて甲州弁乱用は止めて敬語と甲州弁を組み合わせた声掛けを実践している。	居室に入る時や、トイレ誘導の声かけなどブラブラや誇りを損ねないよう配慮した対応をしている。利用者の状況を理解して、一人ひとりの気持ちを大切に考えて会話するよう心がけている。利用者の個人情報の書類等は事務所で管理し、申し送りも小声で行うようにしている。		

自己評価および外部評価結果

事業所名: **めだかの学校シニア**

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名(1)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	決められた日課だけでなく、利用者の顔色を見たケアを行い、利用者の「今」を大切にしたい働きかけを行っている。また衣服にしても利用者の思いを大切にしている。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	決められた日課だけでなく、利用者の顔色を見たケアを行い、利用者の「今」を大切にしたい働きかけを行っている。「生活の場」を意識した支援を心がけている。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	女性の利用者だと家族が持ってきてくれた化粧品や衣服でオシャレな身だしなみを行っている。男性の場合は整髪・髭剃り支援を行い身だしなみに気を配るようにしている。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	それぞれの役割を大切に一回の食事で多くの利用者が関わられるような工夫をしている。食事が楽しく、安全に利用者にとって生き甲斐になるよう工夫している。	職員が献立や調理を担当している。週2回、夕食を自由メニューとして利用者と相談しながら献立を決めている。その日の食材は、地域のスーパーに職員と行って買い物をして調理や盛り付け、片付け、お茶入れ等は利用者の出来る事の関わりを持つようにしている。下階の子供達との食事会もあり、楽しみとなっている。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりの状態や症状に合わせて食事やおやつを提供をしている。栄養摂取が十分でない利用者の方には高カロリーな捕食を心がけて対応している。また場面に応じて水分チェック表を付けて対応している。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後必ず口腔ケアを行っている。車椅子の方でも洗面所等を使い口腔ケアを行っている。			
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	トイレの間隔や回数、量も人によって違うので状態を把握して時間や状態を見て誘導してオムツではなくトイレで排泄ができるよう支援している。今現在9名全員がトイレでの排泄が出来る。	排泄チェック表を使用し、時間や様子を察知してトイレで排泄出来るよう支援している。夜間はポータブルトイレを使用している利用者もいるが全員立位は可能である。時間を見はからって誘導することにより、尿取パットの使用を無くしたり、パットの大きさを替えて自立につながるよう、見直しについても話し合いを行っている。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	薬での対応もしているが、極力自然排泄が出来るように運動や牛乳を飲んだりの工夫をしている。またそれを記録に残し連続性のケアになるようにしている。			
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴は利用者にとって大切なのでその日の体調を見ながら束縛なく入浴が出来るようにしている。時間等も本人のニーズに出来る限り答えられるようにしている。	土・日曜日に関係なく、午前・午後を通していつでも入浴できるようにしている。利用者のその日の希望に合わせて入浴できるよう、一人ひとりに合わせた入浴支援を行っている。入浴を拒む利用者には、声かけの工夫をしている。基本的には、週3~4回入浴できるように支援している。		

自己評価および外部評価結果

事業所名: **めだかの学校シニア**

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名(1)	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの状況に応じて、利用者の方がぐっすり休まれるように対応している。人によっては日中に少し仮眠を取る利用者もいる。ぐっすり眠れるように日中の過ごし方や、電気・温度などにも配慮している。			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬に関しては危険なので用途などをケース記録の後ろに添付して皆で理解して行っている。またケアノートと言う医務の申し送りノートを作り皆で情報共有して取り組んでいる。			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	その人らしく生活ができるよう支援している。一人ひとりの出来ることを大事にして残存機能を生かしながら取り組んでいる。草取りや料理、ピアノ・絵画、日記など。			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	個別外出や全員で外に出かけたりなどの外的刺激を大事にしている。立地上、外に出やすい環境なので有効活用している。外的刺激を意識した支援を行うようにしている。	日常的には、事業所周辺を散歩したり近くのドラッグストアに買い物に行っている。周辺には公共の地域資源が数多くあり、日頃から活用して外出を楽しんでいる。また、個別外出として利用者の希望を聞いて、職員が計画を立て積極的に外出している。季節の外出としてはお花見や紅葉見物等車の乗り降り、歩くことにも重点を置き、リハビリも兼ねて楽しめる外出支援に努めている。		
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	買い物の時に支払ったりお金を持つ楽しみ、使う喜びを大事に出来るようにしている。家族からの要望もあり何人かの利用者はお金も所持している。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	たまに電話で話をしたり年賀状を書いて送るようにしている。面会に多くの方が来てくれるのであまり今現在は必要性はないが。			
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を探り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	生活の場を意識して家庭的な雰囲気になるようにしている。利用者が書いた作品などを掲示して雰囲気作りをしている。利用者が混乱しないように寄り添った支援を心掛けている。	3階部分が事業所になっていて、利用者が日中過ごしている共用の場所は、対面式キッチンと同じ空間にダイニングテーブルが置かれ、調理する音や匂い、作業をしている様子が身近に感じられ、家庭的な雰囲気になっている。壁には、利用者が書いた習字・手芸の作品・行事の写真等が飾られ、限られたスペースの中で利用者は住み慣れた家のように過ごせる環境を整えている。		
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	過去には自分の居室に他の利用者呼び話をしている利用者もいた。玄関前にソファを置いたりして限られた中ではあるが「空間」作りをしている。場の提供を出来る限り心掛けている。			
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	基本的に居室は利用者本人、家族が自由に使い、家庭的な雰囲気が出来ている。男性の利用者やキーパーソンが家族が男性の場合は殺風景な居室もあるが家庭らしく工夫している。	居室には、ペット・照明器具・カーテン・エアコン・吊戸棚が備え付けになっている。冷蔵庫やテレビ、仏壇、整理ダンス等馴染みのあるものを持ち込み、家族等と一緒に配置してその人らしく過ごせるような部屋作りがされている。		
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ワンフロア環境なので生活しやすくはなっている。段差や危ないと思ったところは極力改善して対応している。利用者が安心・安全に生活できるように常に考えている。			